

目 次

路上故障・出張修理ワースト 20	1
<u>1 前回運行時の異常箇所</u>	<u>3</u>
<u>2 車のまわりで（左側）</u>	<u>3</u>
<u>車のまわりで（前側）</u>	<u>5</u>
<u>車のまわりで（右側）</u>	<u>5</u>
<u>車のまわりで（後ろ側）</u>	<u>8</u>
<u>3 車内で</u>	<u>8</u>
<u>4 運転席で</u>	<u>16</u>
<u>5 安全な場所で徐行しながら</u>	<u>21</u>
<u>6 困ったときの処置</u>	<u>21</u>

一日の運転を始める前に必ず日常(運行前)点検を行ってください。簡単な点検により常に車の状態を知っておくと、思わぬトラブルを未然に防止できます。

点検の結果異常があるときは、ふそうサービス工場で修理を受けてから運行してください。

！注意

エンジン点検口を開けて点検する項目もあります。安全には十分注意してください。



日常(運行前)点検は道路運送車両法により運転者に義務づけられています。



路上故障・出張修理ワースト 20

No.	故障内容	件数	予防効果
1	タイヤパンク(スペアなし,脱着工具なし)	10	○
2	ダイナモ(オルタネーター)チャージ不良	8	△
3	エンジンがかからない	7	○
4	シャシー回りのパイプ,ホースのエア漏れ	6	○
5	ファンベルトの折損	6	○
6	トランスミッションコントロール操作不良	5	△
7	クラッチが切れない,すべる	5	△
8	バッテリー不良	5	○
9	エンジンの回転が上がらない	4	○
10	ウォーターポンプ,ホースの水漏れ	4	○
11	接触事故等による不具合	4	
12	エンジンから異音ができる	4	○
13	燃料漏れ	3	△
14	スターターが回らない	3	○
15	その他の電気関係の故障	3	△
16	エンジン本体の故障	3	△
17	エンジンオーバーヒート	2	△
18	その他のシャシー装置の故障	2	△
19	ワイパーが作動しない	2	○
20	ギヤチェンジができない	1	△

○印 日常(運行前)点検

△印 定期点検

路上故障の大半は日常点検や定期点検で予防ができます。

※印の項目は車の走行距離、及び運行時の状態から判断し、適切な時期に行ってください。たとえば、長距離を走行するとき、洗車、給油を行うときなどを目安に行ってください。

1 前回運行時の異常箇所

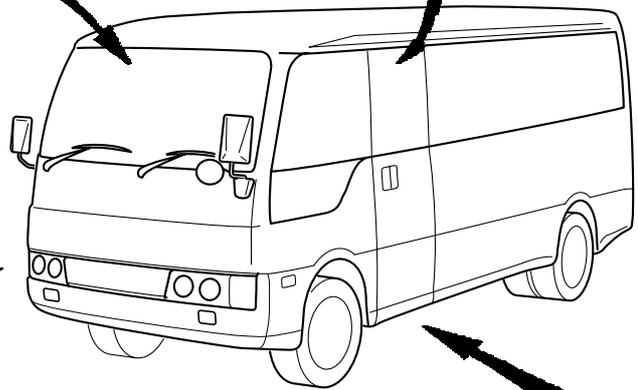
- 1. 前日または前回運行時に異常のあった箇所の点検

4 運転席で

- 1. ブレーキリザーバータンクの液量
- 2. ブレーキペダルの踏みしろ
- 3. 駐車ブレーキレバーの引きしろ
- 4. ※ウインドーウォッシャーの液量、噴射状態
- 5. ※ワイパーのふき取り状態
- 6. ※エンジンのかかり具合、異音
- 7. ※エンジンの低速及び加速の状態

3 車内で

- 1. ※バッテリー液の量
- 2. ※エンジンオイルの量
- 3. ※ファンベルトの貼り具合、損傷

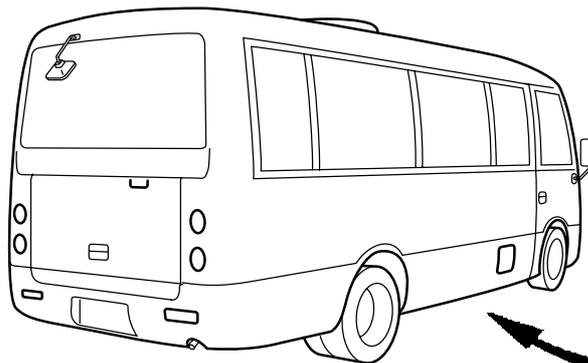


2 車のまわりで（前側）

- 1. ランプ類の点灯、点滅具合、汚れ、損傷（ヘッドランプ、ターンシグナルランプ、フォグランプ）

2 車のまわりで（左側）

- 1. タイヤの点検
空気圧、き裂、異常な摩耗
- 2. ※タイヤの溝の深さ



2 車のまわりで（後ろ側）

- 1. ランプ類の点灯、点滅具合、汚れ、損傷（ターンシグナルランプ、ストップランプ、バックアップランプ、ライセンスランプ）

2 車のまわりで（右側）

- 1. タイヤの点検
空気圧、き裂、異常な摩耗
- 2. ※タイヤの溝の深さ
- 3. ※冷却水の量

5 安全な場所で徐行しながら

- 1. ブレーキの効き具合

1 前回運行時の異常箇所

・運行に支障はありませんか？

前日または前回の運行時の異常箇所について、その箇所がきちんと修理され、正常になっているか点検してください。

(自分で修理できない場合は、最寄りの三菱ふそうサービス工場にて修理を受けてください)

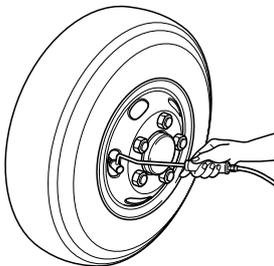
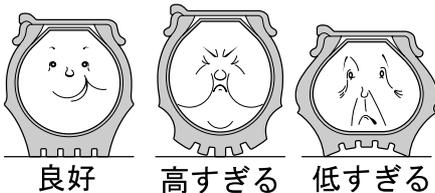
アドバイス

わずかな不具合でも見落としなくチェックしてください。

2 車のまわりで（左側）

1. タイヤの点検

●空気圧の点検



・タイヤ接地部のたわみ状態を見て空気圧が適当であるか点検します。

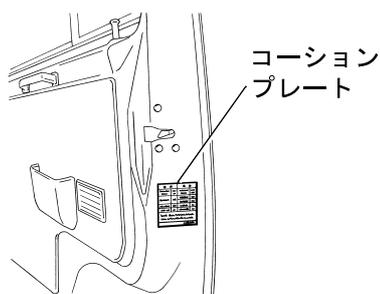
・エアゲージを使用すれば空気圧は正確に点検できます。空気圧が不良のときは標準空気圧に調整してください。

点検のポイント

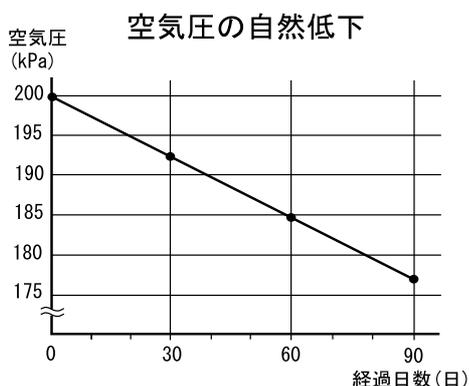
空気圧の点検及び調整は必ず走行前のタイヤが冷えている状態で行ってください。

走行直後はタイヤの発熱によりタイヤ内の空気が膨張し、空気圧が高くなっています。異常ではありませんので空気を抜かないでください。タイヤが冷えれば正常値に戻ります。

- ・扁平タイヤは外観から空気圧の判断がしにくいので、必ずエアゲージで点検してください。
- ・ダブルタイヤの内側と外側タイヤで空気圧の差をつけないでください。



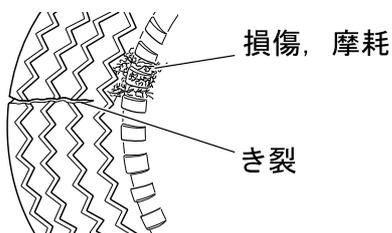
タイヤの標準空気圧を示したコーションプレートが運転席側ドア部にはり付けてあります。



故障の原因

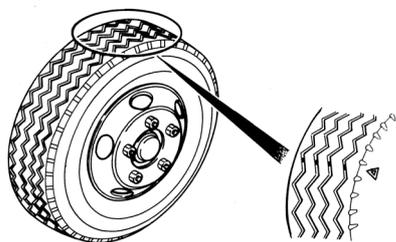
空気圧は知らないうちに低下します。必ず、エアゲージで確認してください。空気圧が低下すると、タイヤは偏って摩耗することになるばかりか、損傷を起こしやすくなり、タイヤが過熱しバースト（破裂）の原因になります。思わぬ事故の元となりますので、常に基準の空気圧に調整してください。

●き裂、損傷及び異常な摩耗の点検



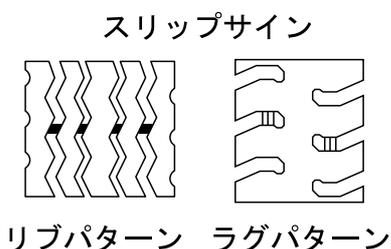
- ・タイヤの接地面や側面にき裂や損傷がないか、極端にすり減っている個所がないか点検します。
- ・タイヤにくぎ、石、その他異物が刺さったり、かみ込みなどしていないか点検します。

2. タイヤ溝の深さ点検



- ・タイヤ溝の残りの深さを点検します。
- ・残り溝が1.6mm以下になるとスリップサイン表示位置（△マーク）にスリップサイン（溝の一部がなくなる）が現れます。

スリップサインの出たタイヤは危険です。新品タイヤに交換してください。また、一般走行時と高速走行時では残り溝深さ限度が異なります。下表の限度値以下のタイヤは新品に交換してください。



タイヤ溝の深さの限度 (mm)	
一般走行時	1.6以上
高速走行時	2.4以上

故障の原因

残り溝が少ないとスリップや高速走行時のハイドロプレーニング現象を起こしやすくなります。

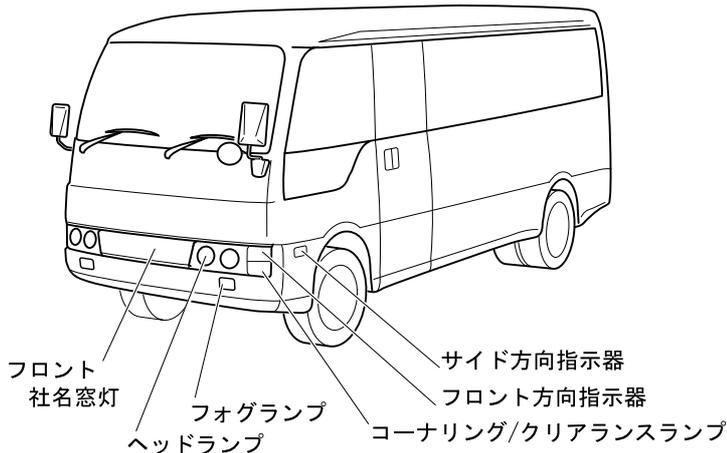


ハイドロプレーニング現象とは、水がたまった路面を高速走行するとき、一定速度以上になるとタイヤが路面から浮き上がり、水上を滑走する状態になって車が操縦不能になる現象をいいます。



車のまわりで（前側）

1. ランプ類の点灯，点滅具合，汚れ，損傷点検



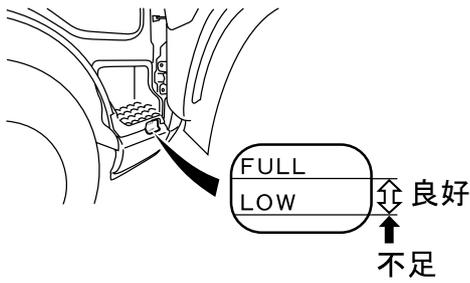
- ・運転席の各スイッチを作動させ、各ランプの点灯，点滅状態を点検します。
- ・各ランプ類のレンズの汚れや損傷がないか点検します。
- ・点検で点灯や点滅しないときは球切れやヒューズ切れが考えられます。不具合部品を交換してください。不具合部品を交換しても点灯や点滅しないときは三菱ふそうサービス工場での点検をお受けください。

車のまわりで（右側）

1. タイヤの点検

車両のまわりで（左側）の項を参照してください。

2. 冷却水量の点検



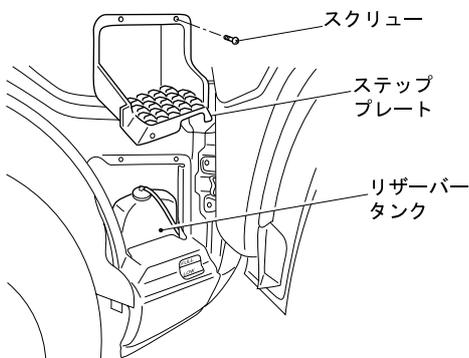
- ・点検はエンジン始動前の冷却水が冷えているときに行います。
- ・運転席ドアを開け、ステップ部の点検窓から確認します。リザーバタンク内の冷却水面が“FULL”と“LOW”の線の間であれば良好です。
- ・冷却水面が“LOW”の線より下の場合は、冷却系統から冷却水の漏れがないか点検した後、冷却水を“FULL”の線まで補給してください。
- ・冷却水が異常に減少しているときや、短時間で再び減少するときは冷却系統から水漏れが発生しているおそれがあります。駐車していた地面に水が残っていれば、水漏れが考えられます。

知識

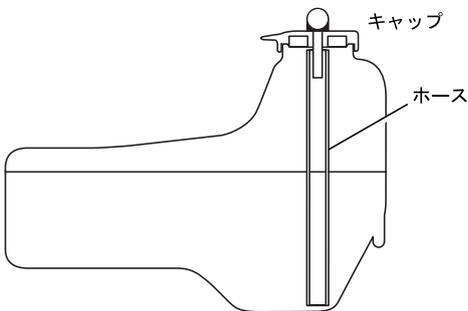
冷却水量の点検はエンジンを始動する前に行います。冷却水温が高いと温度による水の膨張で水量が実際より多くなります。



●補給



- ・スクリューを外し、ステッププレートを外します。
- ・リザーバタンクのキャップを外し“FULL”の線まで冷却水を補給します。補給後はキャップを確実に取付けてください。



- ・リザーバタンクのキャップに接続されているホースをリザーバタンク底部まで確実に差し込んでください。

⚠️ 注意

- ・ロングライフクーラントは毒性がありますので絶対に飲まないでください。誤って飲んでしまったときはすぐにおう吐させ、医師の治療をお受けください。
- ・ロングライフクーラントが目に入ったときはすぐに清水で洗眼し、医師の治療をお受けください。
- ・ロングライフクーラントを保管するときは確実に蓋をして、お子さまの手の届かない所に置いてください。
- ・ロングライフクーラントは引火性がありますので火気に近づけないでください。
- ・ロングライフクーラントが皮膚や衣服に付着したときはすぐに水洗いした後、石けんで洗ってください。

冷却水はロングライフクーラントと水道水を規定の割合で混合したものを使用します。

ロングライフクーラントは防錆と凍結防止を兼ねていますので年間を通じて使用できます。

稼働する地域の最低気温を基に混合割合を次の表から求めます。

ロングライフクーラント混合割合	
最低気温 (°C)	割合 (%)
-10	30
-15	35
-20	40
-25	45
-30	50
-35	55
-40	60

⚠️ 注意

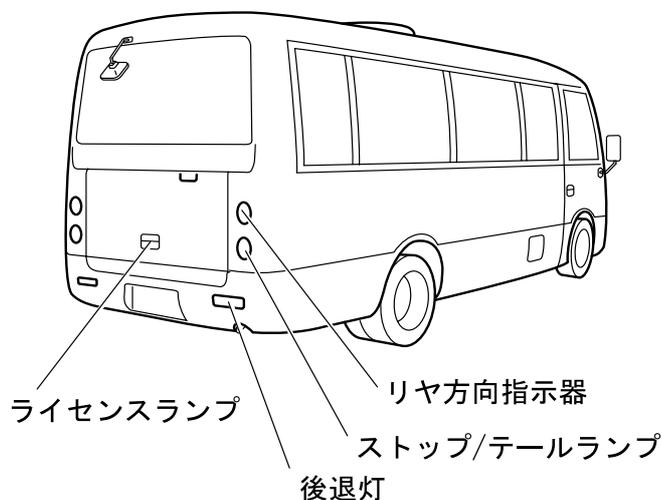
- ・不凍液、防錆剤及び他銘柄のロングライフクーラントとの混用はおこなわないでください。
- ・冷却水を補給するときは、注入してあるロングライフクーラントと同一銘柄、同一濃度を用いてください。
- ・水だけを補給しないでください。冷却水の濃度が薄くなり防錆効果、凍結防止効果が低下します。
- ・ロングライフクーラントを混合した冷却水は産業廃棄物として処理してください。ご自身で処理できないときは、三菱ふそうサービス工場に処理をご依頼ください。

アドバイス

- ・ロングライフクーラントは30%～60%の範囲で使用してください。30%以下になると防錆効果が、60%以上では凍結防止効果が低下します。
- ・リザーバタンク内のロングライフクーラントを混合した冷却水に沈殿物が溜まることがありますが機能上問題ありません。

車のまわりで（後ろ側）

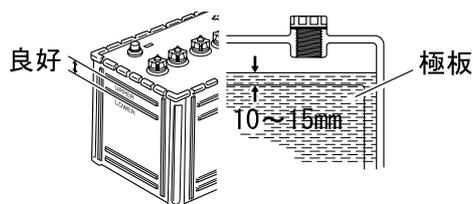
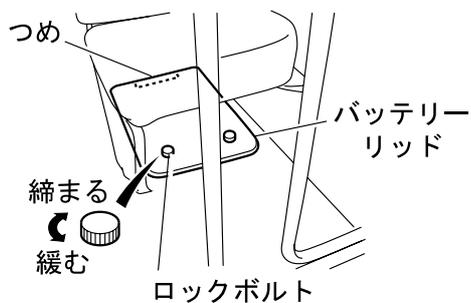
1. ランプ類の点灯，点滅具合，汚れ，損傷点検



- ・運転席の各スイッチを作動させ，各ランプの点灯，点滅状態を点検します。
- ・ブレーキペダルを踏み込んで，ストップランプが点灯するか確認します。
- ・ギヤを後退，オートマチック車は“R”にしたとき，後退灯が点灯するか確認します。
- ・各ランプ類のレンズの汚れや損傷がないか点検します。
- ・点検で点灯や点滅しないときは球切れやヒューズ切れが考えられます。不具合部品を交換してください。不具合部品を交換しても点灯や点滅しないときは三菱ふそうサービス工場でお受けください。

3 車内で

1. バッテリー液量の点検



バッテリー点検口がセンターステップ後のシート下にあります。

- ・開けるにはロックボルトを緩めます。
- ・バッテリーリッドを持ち上げ外します。
- ・閉めるときはバッテリーリッド後端をつめに引っ掛けます。
- ・バッテリーリッド全体を押さえながら，ロックボルトを確実に締付けます。
- ・バッテリー液面がバッテリーケース側面の“UPPER”レベルラインと“LOWER”レベルラインの間にあるか点検します。
- ・“LOWER”レベルライン以下のときはバッテリー液または蒸留水を“UPPER”レベルラインまで補給します。
- ・レベルライン表示のないバッテリーは，液面が極板上10～15mmにあるのが正常範囲です。

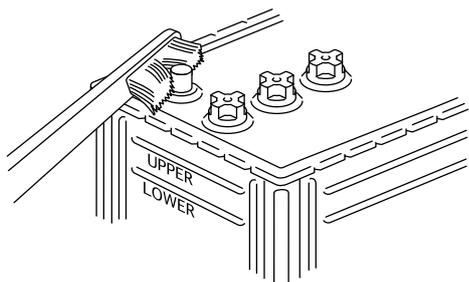
⚠️ 注意

- ・バッテリーからは引火性の水素ガスが発生しています。バッテリーの近くで火気を近づけたり、火花を飛ばさないでください。水素ガスに引火し爆発するおそれがあり危険です。
- ・使用済みバッテリーはお子さまが触れない場所に保管してください。液漏れなどにより失明ややけどの原因になります。
- ・バッテリー液は希硫酸ですので、皮膚や衣服に付着するとその部分が侵されます。取扱いには十分注意してください。付着したときは直ちに多量の水で洗い流し、石けんで十分に洗ってください。万一、目に入ったときは直ちに多量の清水で洗眼した後、速やかに眼科医の治療を受けてください。バッテリーを取扱うときは保護メガネとゴム手袋を着用してください。
- ・バッテリー液を補給したときは必ず充電または走行してください。特に冬期はバッテリー液が凍結しバッテリーケースを破損するおそれがあります。
- ・バッテリー液は上限（UPPER）レベルラインを超えて補充しないでください。
- ・上限（UPPER）以上入れると液があふれ、バッテリー端子などの腐食の原因になります。

故障の原因

- ・バッテリー液量が下限（LOWER）レベルライン以下のまま使わないでください。劣化を早めたり、発熱や爆発するおそれがあります。
- ・使用済みバッテリーは必ず端子が上面になるよう保管してください。横倒しにすると液漏れや火災の原因になります。

●端子の清掃

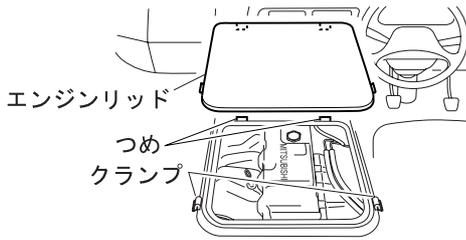


- ・端子部に緩みや腐食がないか点検します。
- ・端子部が腐食し白い粉が付着しているときは、ぬるま湯でよく洗いふき取ります。端子部が著しく腐食しているときはバッテリーケーブルを外し、ワイヤーブラシや紙やすりで磨きます。清掃後は端子部にグリースを薄く塗っておきます。

⚠️ 注意

- ・バッテリーを外すときは必ずバッテリーケーブルの⊖端子側から行い、取付けるときはバッテリーケーブルの⊖端子側を最後にしてください。⊖端子がバッテリーに接続されていると工具などが⊕端子と車体に触れたときにショートし危険です。
- ・バッテリーの取付けは確実に行ってください。取付けが不完全ですと、走行中の振動でケースや極板を傷めバッテリーの寿命を短くします。
- ・バッテリーを充電するときは車から外して行ってください。
- ・バッテリーを廃却するときは、バッテリー販売業者に処理を依頼してください。

2. エンジンオイルの量

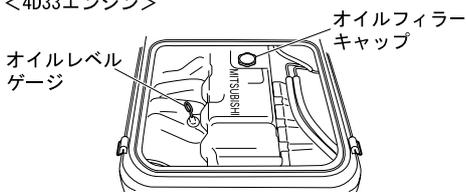


点検の方法はエンジン点検口を開けてから行います。

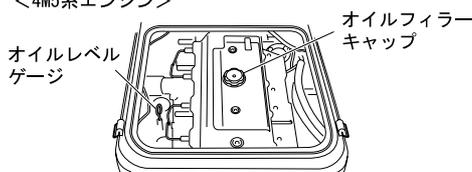
- ・左右のクランプを外します。
- ・エンジンリッドを持ち上げ外します。
- ・締めるときはエンジンリッドの前側をつめに引っ掛けます。
- ・左右のクランプをロックします。このときシートベルトを挟み込まないように注意してください。

●オイルレベルゲージでの点検

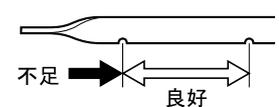
<4D33エンジン>



<4M5系エンジン>



オイルレベルゲージ



- ・オイルレベルゲージを抜き取り、付着したエンジンオイルを布で拭き取ります。
- ・再びオイルレベルゲージをいっぱいに差し込み、静かに抜き取ります。オイルレベルゲージに付着したエンジンオイルの位置が切り欠きの範囲にあれば良好です。
- ・不足のときは指定のエンジンオイルをオイルフィルターから補給します。範囲以上のときはオイルパンのドレンプラグからエンジンオイルを抜き取り範囲内にします。著しくエンジンオイルが汚れているときはオイルを交換します。
- ・点検後はオイルレベルゲージをいっぱいに差し込みます。

点検のポイント

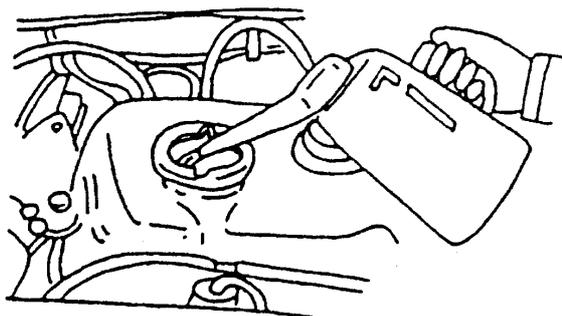
- ・点検は平坦な場所でエンジンを止めた状態で行います。車両が傾いていたり、エンジン運転時や停止直後では正確なエンジンオイル量は測れません。エンジンを止めてから30分以上置いてから点検してください。
- ・エンジンを止めて、すぐにエンジンオイル量を点検すると、エンジン各部に行き渡っていたオイルがオイルパン内に落ちきらず、オイル量が実際より少なく表示される場合があります。
- ・エンジンは必ず停止した状態で点検してください。

故障の原因

エンジンオイル不足は、潤滑不良となりエンジンの寿命を縮め、最悪の場合はエンジン焼付きの原因となります。

エンジンオイルは定められた時期で交換してください。

●補給



- ・オイルフィルターキャップの周りを清掃し、補給時にゴミなどが入らないようにします。
- ・オイルフィルターキャップを外し、エンジンオイルを補給します。
- ・オイルフィルターキャップを閉め、5分以上おいてからエンジンオイル量をオイルレベルゲージで点検します。
エンジンオイルを入れすぎたときはオイルパンのドレーンプラグから抜き取り適量にします。

⚠注意

補給時にエンジンオイルをこぼさないよう注意してください。

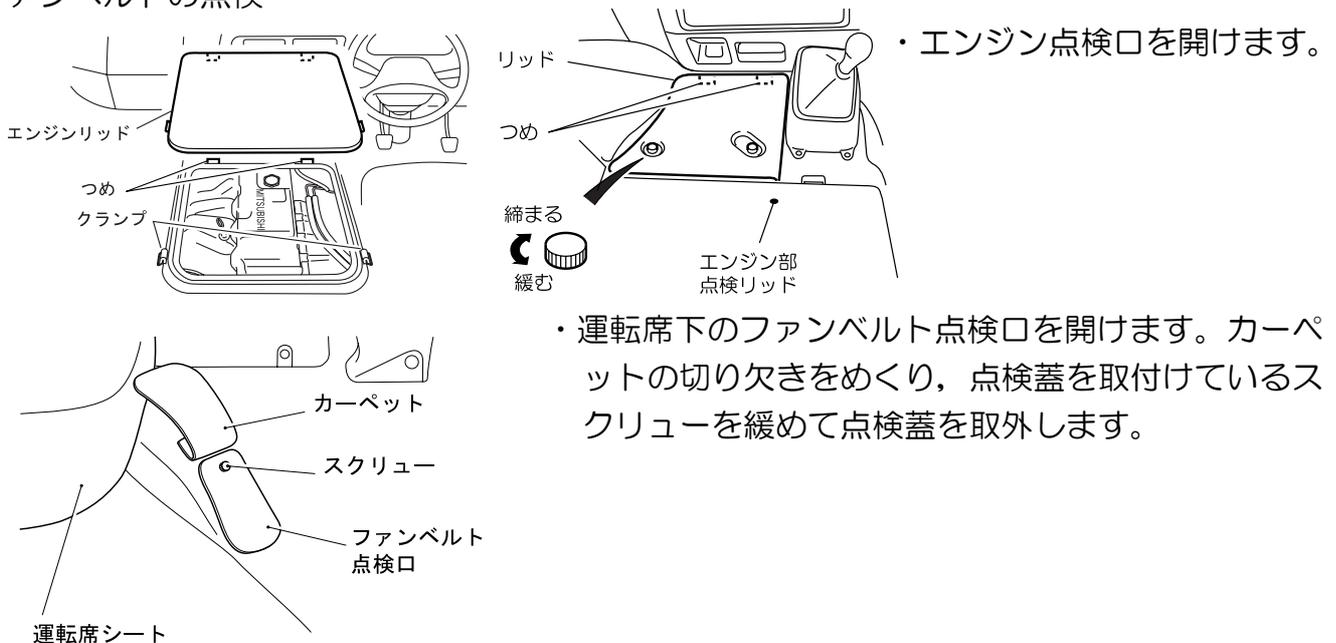
排気管などに付着すると火災の原因になります。こぼしたときは完全にふき取ってください。

3. ファンベルトの張り具合、損傷点検

！注意

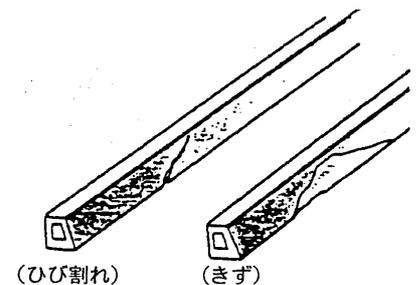
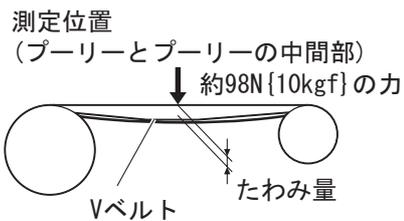
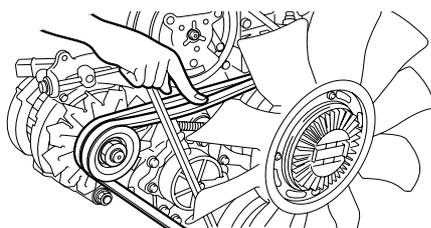
ファンベルトを点検するときは必ずエンジンを停止してください。エンジンの回転部分に触れたり近づいたりすると手や衣服などが巻き込まれ思わぬけがをするおそれがあります。

ファンベルトの点検



・ベルトの中央部を指で約98N {10kgf} の力で押し、ベルトのたわみ量が基準値内であるか確認します。また、ベルトに損傷がないか点検します。

押す力約98N {10kgf}



点検のポイント

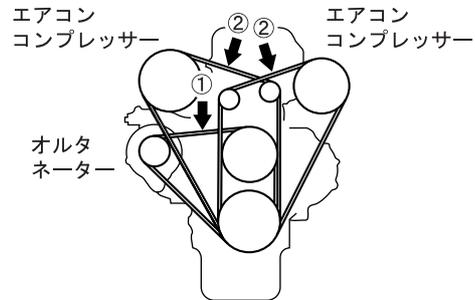
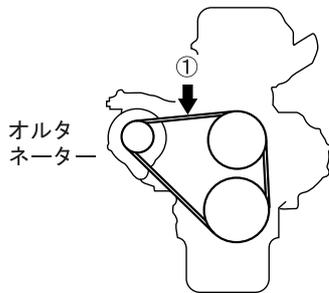
点検時にはベルトに油脂を付着させないでください。ベルトのスリップの原因になります。

故障の原因

ベルトの緩みや張りすぎはオーバーヒート、充電不良及びオルタネーター、ウォーターポンプ等の故障の原因になります。ベルトは常に正しい張りに調整してください。

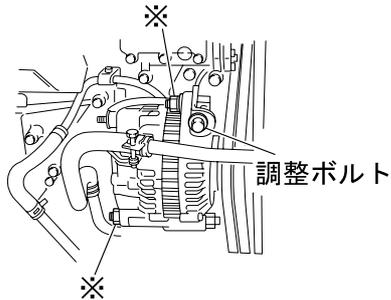
●4D33エンジン

1本あたりのベルトの張り (mm)	
(ベルトの中央を98N {10kgf}の力で押したときのたわみ量)	
①	ファンベルト
②	エアコン用ベルト



ファンベルトの調整

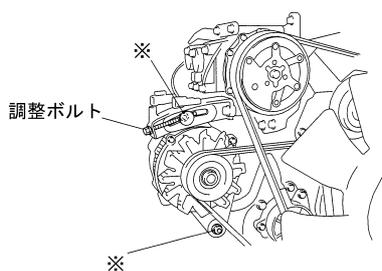
<35Aオルタネーター>



オルタネーター部

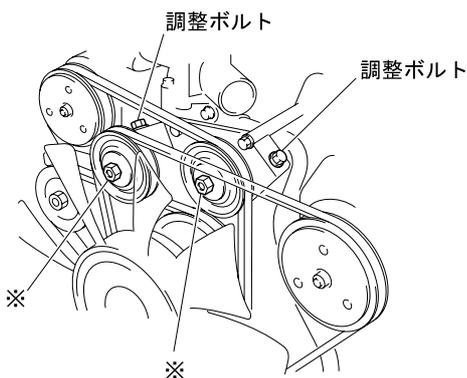
- ・ベルトのたわみ量が基準値内になるよう調整します。オルタネーターを取付けている上下のボルト,ナット(※印)を少し緩めます。
- ・調整ボルトを回して、ベルトのたわみ量が基準値内になるよう張りを調整します。右に回せばベルトの張りは強くなります。
- ・調整後、オルタネーター取付けボルト,ナット(※印)を確実に締付けます。

<50A, 80Aオルタネーター>



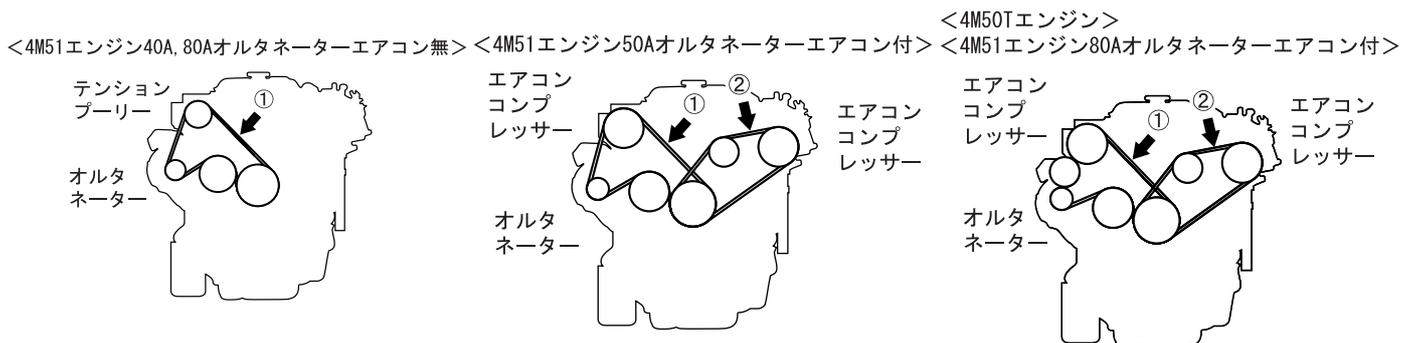
エアコンコンプレッサー部

- ・テンションプーリー取付けナット(※印)を少し緩めます。
- ・調整ボルトを回して、ベルトのたわみ量が基準値内になるよう張りを調整します。右に回せばベルトの張りは強くなります。
- ・調整後、テンションプーリー取付けナット(※印)を確実に締付けます。



●4M5系エンジン

1本あたりのベルトの張り (mm) (ベルトの中央を98N {10kgf}の力で押したときのたわみ量)				
①	ファン ベルト	エアコ ン付	50Aオルタネーター	9~11
			80Aオルタネーター	8~10
		エアコ ン無	40Aオルタネーター	11~13
			80Aオルタネーター	9~11
②	エアコン用ベルト			6~8

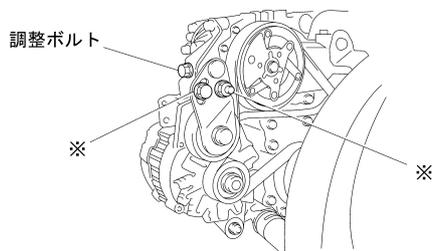


ファンベルトの調整

オルタネーター部

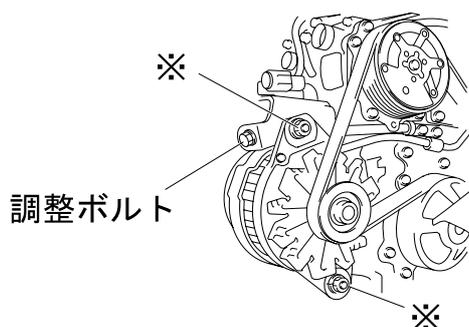
<4M50Tエンジン>

<4M51エンジン80Aオルタネーター,エアコン付>

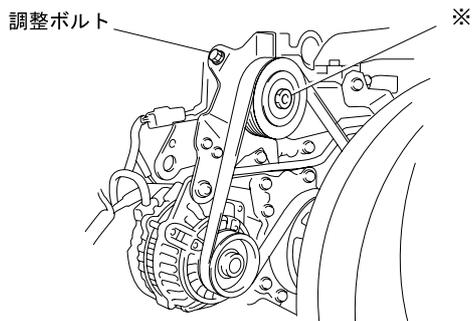


- ・ベルトのたわみ量が基準値内になるよう調整します。オルタネーターを取付けている上下のボルト、ナット(※印)を少し緩めます。
- ・調整ボルトを回して調整します。右に回せばベルトの張りは強くなります。調整後、オルタネーター取付けボルト、ナット(※印)を確実に締付けます。

<4M51エンジン50Aオルタネーター, エアコン付>



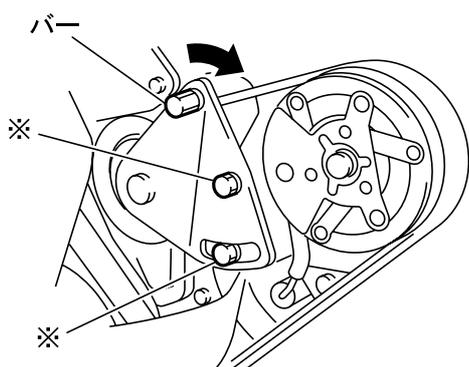
- ・ベルトのたわみ量が基準値内になるよう調整します。オルタネーターを取付けている上下のボルト、ナット(※印)を少し緩めます。
- ・調整ボルトを回して調整します。右に回せばベルトの張りは強くなります。
- ・調整後、オルタネーター取付けボルト、ナット(※印)を確実に締付けます。



<4M51 エンジンエアコン無>

- ・ベルトのたわみ量が基準値内になるよう調整します。オルタネーターを取付けているナット(※印)を少し緩めます。
- ・調整ボルトを回して調整します。右に回せばベルトの張りは強くなります。

調整後、オルタネーター取付けボルト、ナット(※印)を確実に締付けます。

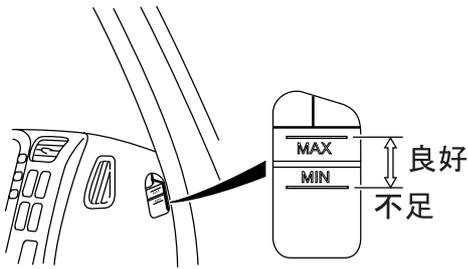


エアコン用テンションプーリー部

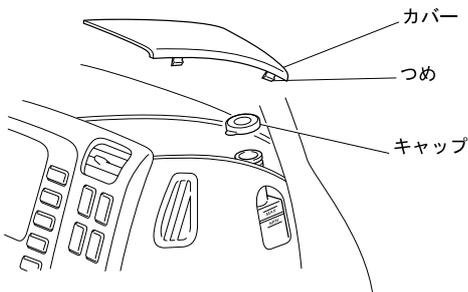
- ・テンションプーリー取付けボルトを少し緩めます。
- ・バーにメガネレンチ等をかけ、矢印方向に押し付けベルトのたわみ量が基準値内になるよう張りを調整します。
- ・調整後、テンションプーリー取付けボルトを確実に締付けます。

4 運転席で

1. ブレーキリザーバータンク液量の点検



- ・運転席ドアを開け点検します。
- ・ブレーキリザーバータンク内の液量が規定の範囲にあるか点検します。
液面が“MAX”と“MIN”の線の間であれば良好です。



- ・液面が“MIN”の線より下の場合は、ブレーキ液配管系に液漏れのないことを確認した後、ブレーキ液を補給します。

故障の原因

液面が異常に低下しているときは、ブレーキ液配管系から液漏れがしているおそれがあります。速やかに三菱ふそうサービス工場で点検をお受けください。



ブレーキ液は通常、ほとんど減少しないものです。液が減るときはブレーキ液配管系からの液漏れが考えられます。なお、ディスクブレーキ車はブレーキパッドが摩耗することにより、リザーバータンクの液面が下がります。



- ・リザーバータンク内の異物の有無を点検し、異物が沈殿しているときは三菱ふそうサービス工場での点検、洗浄をお受けください。

故障の原因

- ・ブレーキ液は必ず1年ごとに交換してください。長期間使用しますと水分を吸収し沸点が大幅に低下します。沸点が低下するとベーパーロック現象が発生しやすくなり危険です。



ペーパーロック現象とは、長い下り坂などブレーキをひんぱんに使用すると、パッドやライニングが極度に高温になりブレーキ液が沸騰し気泡になります。このため、ペダルを踏んでも気泡が圧縮されるため、反動を感じず(スポンジ現象という)踏力が十分伝わらずブレーキが効かなくなる現象をいいます。



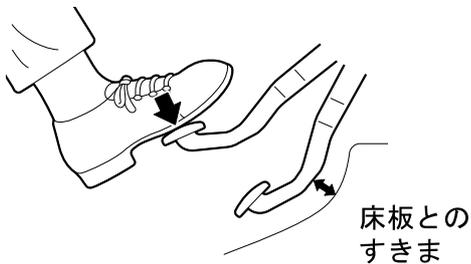
⚠ 注意

- ・ブレーキ液は塗装をはがしますので、こぼしたときはすぐにふき取るか、よく水洗いしてください。
- ・ブレーキ液はリザーバータンクの“MAX”線以上は補給しないでください。
- ・リザーバータンクのキャップはブレーキ液の補給以外は開けないでください。また、補給でキャップを開けたときは確実に閉めてください。
- ・点検時はリザーバータンクのキャップを開けないでください。
- ・銘柄の異なるブレーキ液を混用しないでください。混用するとブレーキ液の性状が変化し沸点の低下やブレーキ部品が損傷することがあります。銘柄の異なるブレーキ液を使用するときは全てのブレーキ液を交換してください。
- ・ブレーキ液にエンジンオイル、軽油、ギヤオイルなどの鉱物油を混用させないでください。少しでも鉱物油が混用するとブレーキ装置の不良、ブレーキの引きずりなどの原因になります。
- ・ブレーキ液は吸湿性が強いので、点検や補給及び保管中に水分が混入しないよう取扱いには注意してください。
- ・ブレーキ液の補給に使用する容器は水分、鉱物性オイルやゴミなどの付着していないきれいなものを使用してください。
- ・ブレーキ液を補給するときはリザーバータンク内にゴミなどの異物が混入しないよう注意してください。異物が混入しますとブレーキ装置の故障の原因になります。

2. ブレーキペダルの踏みしろ点検

ブレーキは保安上重要な装置です。点検で異常があったときは走行せず修理してください。そのまま走行すると重大な事故につながります。

異常が認められたときは三菱ふそうサービス工場に連絡してください。



- ・エンジンを始動しアイドリング回転状態にします。
- ・ブレーキペダルをいっぱい踏み込み、床板とのすきまが規定値であるか点検します。

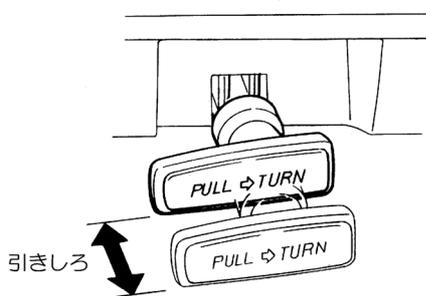
ブレーキペダルと床板とのすきま (mm)
45以上

- ・ブレーキペダルの踏みごたえが適当であるかも点検します。

故障の原因

柔らかくスポンジを踏むように感じるときはブレーキ液漏れや空気の混入が考えられます。異常があるときは三菱ふそうサービス工場点検をお受けください。

3. 駐車ブレーキレバーの引きしろ点検

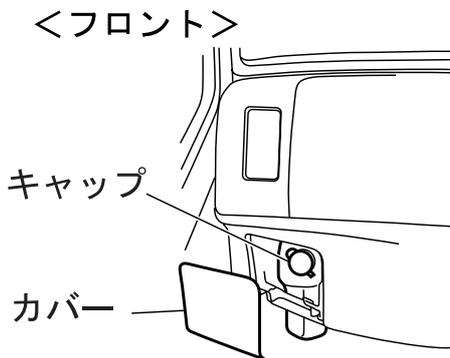


- ・駐車ブレーキレバーを解放した状態から約295N {30kgf} の操作力で引いたときの引きしろが規定値であるか点検します。規定値以外のときは三菱ふそうサービス工場点検をお受けください。

駐車ブレーキレバーの引きしろ(mm)
80~120

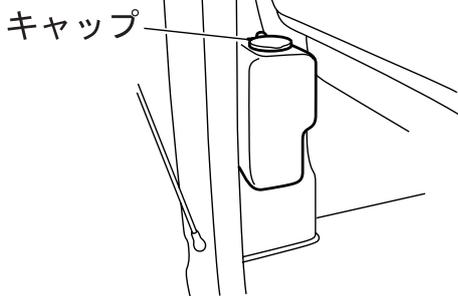
4. ウィンドーウォッシャーの液量、噴射状態点検

●液量



- ・フロント側はカバーを取外します。
- ・ウィンドーウォッシャー液の量を点検します。
液面が見えないときは、ウィンドーウォッシャー液を補給します。
- ・リヤ側はラゲッジルームリッドを開け、点検します。
- ・キャップを外し、ウォッシャー液を補給します。
- ・ウォッシャー液補給後、キャップを確実に取付けます。

<リヤワイパー付車>



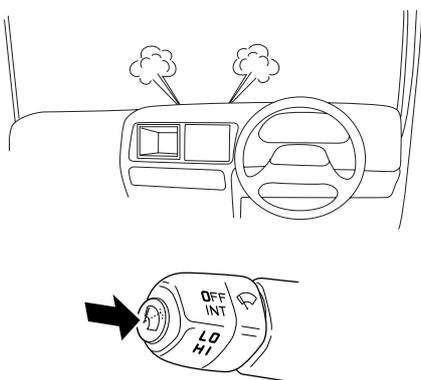
ウォッシャー液は「純正ウィンドーウォッシャー液」と水道水を規定の割合で混合します。混合割合は外気温により異なります。

季節	希釈割合	凍結温度
通常	原液 1 : 水道水 2	約-10℃
寒冷地の冬期	原液 1 : 水道水 1	約-20℃

! 注意

石けん水や台所洗剤を使用しないでください。ノズルの目詰まりや塗装面のしみなどの原因になります。

●噴射状態

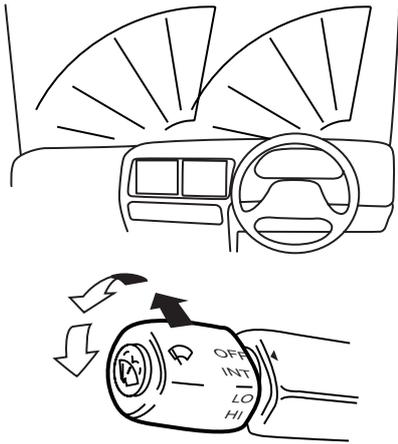


- ・ウィンドーウォッシャースイッチを“ON”にしウォッシャー液がフロントガラスに噴射するか点検します。
- ・ウォッシャータンクにウォッシャー液があるのに噴射しないときはウォッシャーノズルの詰まりが考えられます。ノズル穴を細い針金で清掃します。清掃後も噴射しないときは三菱ふそうサービス工場での点検をお受けください。

! 注意

- ・ウォッシャースイッチは連続20秒以上操作しないでください。モーターが焼き付くおそれがあります。
- ・ウォッシャー液がないときはスイッチを操作しないでください。モーターが焼き付くおそれがあります。

5. ワイパーのふき取り状態点検

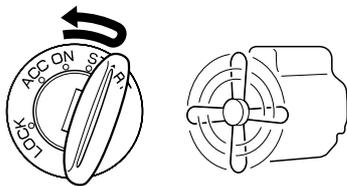


- ・ワイパーのふき取り状態を点検するときはウォッシャースイッチを“ON”にしウォッシャー液をフロントガラスに噴射してから行います。
- ・ワイパースイッチを“INT”，“LO”，“HI”に操作し正しく作動するか点検します。作動状態に異常があるときは三菱ふそうサービス工場で点検をお受けください。
- ・ワイパーの拭き取りにむらやビビリがあるときは、ワイパーブレードを点検し劣化しているときは交換してください。

アドバイス

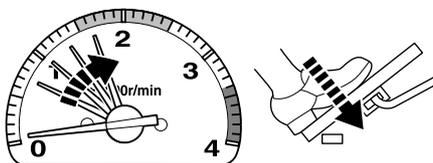
ワイパーのからぶきはフロントガラスを傷付けますので、ガラス面が乾いているときは必ずウォッシャー液を噴射してから動かしてください。

6. エンジンのかかり具合、異音の点検



- エンジンが速やかに始動するか点検します。
また、エンジン始動時及びアイドリング運転時に異音がないか点検します。
異状があるときは三菱ふそうサービス工場で点検をお受けください。

7. エンジンの低速及び加速の状態点検



- ・エンジンを暖機運転した状態で、アイドリング回転が円滑に続くか点検します。タコメーター付車は適正なアイドリング回転数であるか点検します。

アイドリング回転数 (rpm)
約650

アイドリング回転数はアイドリング調整ボタンをオートアイドルにしておけば自動で調整されます。マニュアルアイドルのときは手動で調整します。

- ・車の周りの安全を確認し、徐行や走行状態がスムーズか、またアクセルペダルを徐々に踏み込んだときペダルに引っ掛かりがなくエンジン回転が円滑に上昇するか点検します。
- ・走行状態が不安定だったり、アクセルペダルの踏み込み量に対し車のスピードが追従しないときは、三菱ふそうサービス工場で点検をお受けください。

5 安全な場所で徐行しながら

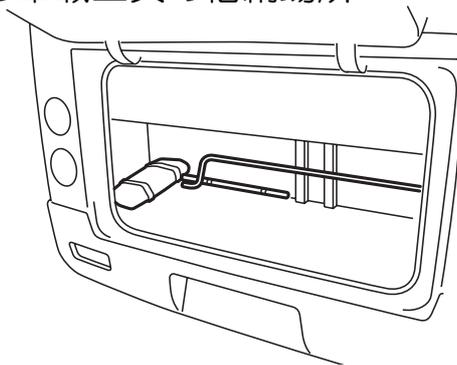
1. ブレーキの効き具合点検



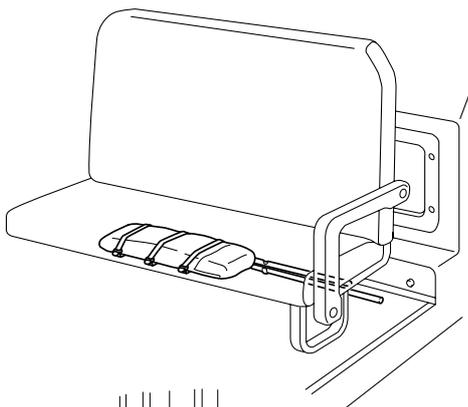
- ・車の周りの安全を確認します。
- ・車を徐行させブレーキペダルを踏み込み、ブレーキの効き具合、片効きがないか点検します。
また、ブレーキペダル操作時はペダルがスムーズに踏み込め、引っかけりや踏力の急激な変動等がないか点検します。
異常があるときは走行せず三菱ふそうサービス工場に連絡してください。

6 困ったときの処置

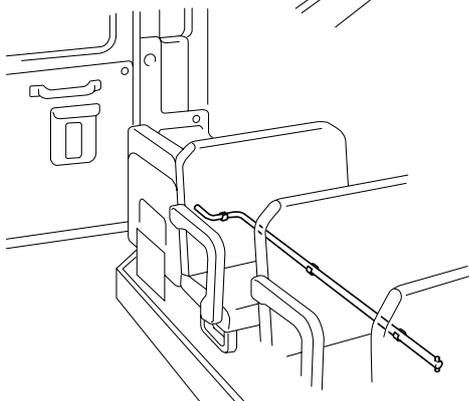
●車載工具の格納場所



非常ドア無車
ラゲッジルーム内に格納されています。

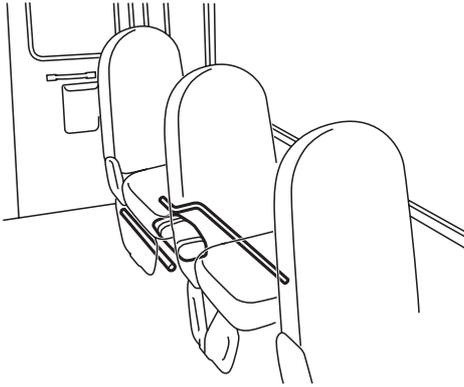


非常ドア付車
〈幼児車〉
・オイルジャッキ及び工具は車両右側最後部シート下に
あります。



・クランクハンドルは車両左側後部シート下にありま
す。

＜スーパーロングボデー34人乗り＞
車両左側最後部シート下にあります。

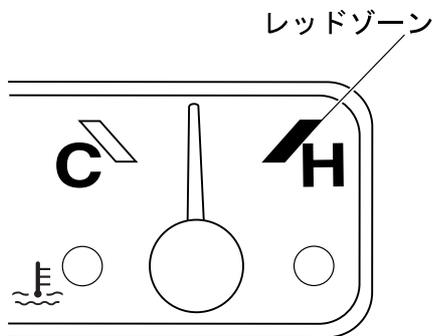


1. オーバーヒートしたとき

⚠ 警告

プレッシャーキャップは水温が下がってから外すか、キャップを布などで覆ってからゆっくりと開けてください。むやみに外すと熱湯や蒸気が噴き出し、やけどをするおそれがあります。

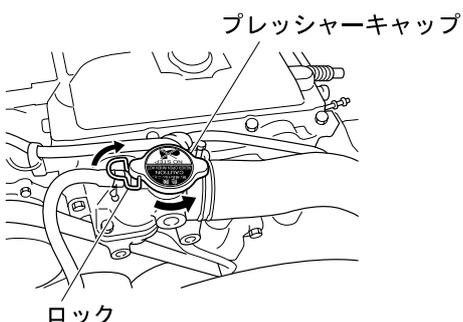
- ・オーバーヒートしたときはリザーバタンク以外にラジエーター本体の冷却水が不足していることがあります。



水温計の針がレッドゾーンを示しているときはエンジンがオーバーヒートを起こしています。安全な場所に停車し、アイドル調整ボタンでエンジンをアイドルよりやや高めで回し続け冷却します。

針が水温計の中央付近まで下がってきたらエンジンを止め、次の点検、処置を行います。

- ・ラジエーターホースなどから冷却水が漏れていないか点検します。
- ・ファンベルトが切れていないか、またベルトの張りは正常か点検します。



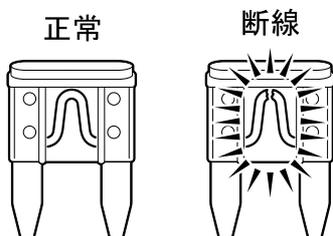
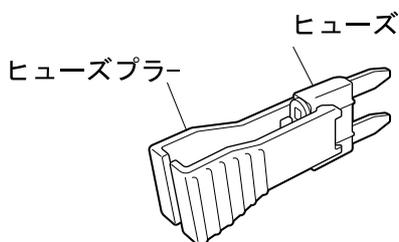
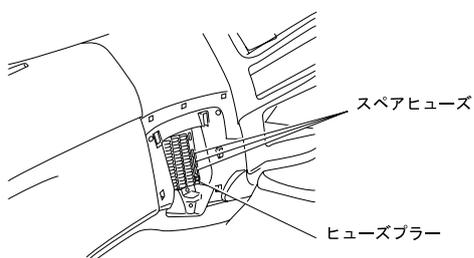
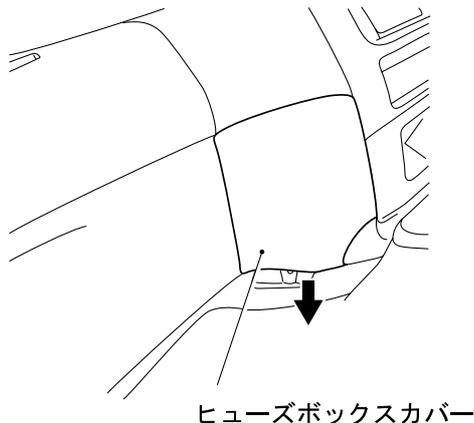
- ・ロックを解除し、プレッシャーキャップを左に回し外します。
- ・冷却水が不足しているときは給水口まで補給します。
- ・プレッシャーキャップを右に回し締め込み、ロックをエンジン側の溝に確実に固定します。
- ・リザーバタンクのキャップを外し“FULL”の線まで冷却水を補給します。補給後はキャップを確実に取付けてください。

注意

- エンジン을すぐに止めないでください。水温が急上昇しエンジンが焼付くことがあります。アイドリング調整ボタンでエンジンをアイドリングよりやや高めで回し続けて冷却してから止めてください。
- 冷たい水を急に入れるとエンジンにき裂が入ることがあります。少しずつ補給してください。

2. ヒューズが切れたとき

●ヒューズの交換



- ・スタータースイッチを“LOCK”，各スイッチを“OFF”にします。
- ・ヒューズボックスはセンターパネルの助手席側にあります。
ヒューズは他にハイカレントヒューズボックスの中にもあります。
ヒューズボックスカバーの下側を手前に引いて取外します。
ヒューズボックスカバーを取付けるときは、上側のつめを合わせ差し込んでから下側を押し込みます。

- ・ヒューズの交換はヒューズボックスにあるヒューズプラーでヒューズをはさみ、抜き取ります。
ヒューズの使用先及びアンペア数(A)はヒューズボックスカバー裏側に記載されています。
- ・ヒューズが切れているときは、必ず記載されたアンペア数のスペアヒューズに交換します。

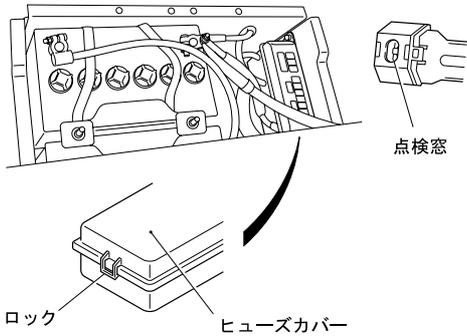
! 注意

ヒューズは必ず純正部品を使用し、規定のアンペア数の物と交換してください。
規定のアンペア数以外の物や針金等を使うと火災を起こすおそれがあります。

! 注意

- ・ヒューズがたびたび切れるときは三菱ふそうサービス工場で点検をお受けください。
- ・ヒューズボックスのカバー周辺には水などをかけないでください。万一、かかってしまったときはヒューズボックスに水滴などが入っていないか確認してください。

●ハイカレントヒューズの点検

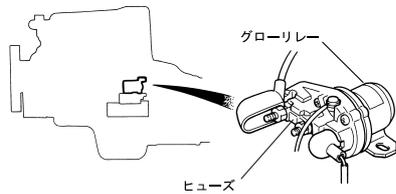


- ・スタータースイッチを“LOCK”，各スイッチを“OFF”にします。
- ・ハイカレントヒューズボックスはバッテリー点検口にあります。
- ・ロックを凸部から外しヒューズカバーを取外します。ヒューズカバーを取付けるときは、ヒューズカバーをボックスにかぶせた状態で真上から押し込み、ロックの穴を凸部に合わせ、カバーを上から押し付けます。
- ・ハイカレントヒューズの点検窓からヒューズが切れていないか点検します。切れているときは三菱ふそうサービス工場で点検をお受けください。

! 注意

- ・ハイカレントヒューズは必ず純正部品を使用し、規定のアンペア数の物と交換してください。規定のアンペア数以外の物や針金等を使うと火災を起こすおそれがあります。
- ・切れたときは三菱ふそうサービス工場で点検をお受けください。
- ・ヒューズカバーを取付けるときは必ず真上から押し付けてください。無理に押し込むとヒューズカバーを損傷するおそれがあります。
- ・ハイカレントヒューズの使用先及びアンペア数（A）は、ヒューズカバー裏側に記載されています。

●エンジン予熱回路のヒューズ



寒冷時にインジケータランプが点灯しないときは、グローリレーのヒューズが切れていないか点検してください。

切れているときはバッテリーの端子を外してから新品のヒューズ（127A）に交換してください。

⚠注意

- ・ヒューズは必ず純正部品を使用し、規定のアンペア数の物と交換してください。規定のアンペア数以外の物を使うと火災を起こすおそれがあります。切れたときは三菱ふそうサービス工場で点検をお受けください。
- ・グローリレーの一方の端子には常時電気がきています。必ずバッテリーの端子を外してから交換作業を行ってください

3. バッテリーあがりのとき

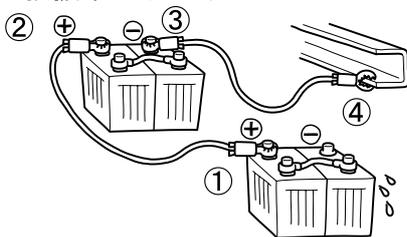
⚠危険

ブースターケーブルの接続順序を間違えないでください。
ブースターケーブルをフレームに接続するときに火花が出ることがありバッテリーから発生している水素ガスに引火し、爆発するおそれがあります。
バッテリーからできるだけ離れた場所に接続してください。

バッテリーあがりのためブースターケーブルを使用して救援車のバッテリーと接続してエンジンを始動するときは、次の方法で行ってください。

<取付け>

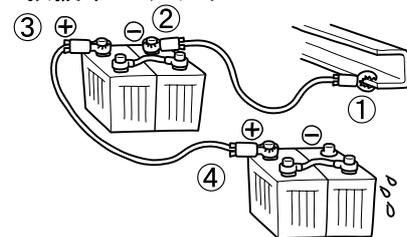
救援車バッテリー



- ・救援車のエンジンを止めます。
- ・ブースターケーブル（赤）を故障車バッテリー⊕端子に接続します。他方を救援車のバッテリー⊕端子に接続します。
- ・ブースターケーブル（黒）を救援車バッテリーの⊖端子に接続し、他方を故障車のバッテリーからできるだけ離れたフレームに接続します。

<取外し>

救援車バッテリー



- ・接続後、救援車のエンジンを始動し、アイドル回転よりやや高め回転数にします。次に故障車のエンジンを始動します。

寒冷時などでエンジンがかかりにくいときは救援車のエンジン始動後数分たってから行ってください。

- ・故障車のエンジン始動後、ブースターケーブルを接続したときと逆の順序で取外してください。

⚠危険

- ・けん引または押しがけによるエンジンの始動は絶対に行わないでください。ブレーキの効きが悪くなりハンドル操作も異常に重くなります。
- ・ブースターケーブルをつなぐ前にバッテリー液量を確認してください。バッテリー液量が下限（LOWER）レベルライン以下で充電すると劣化を早めたり、発熱や爆発のおそれがあります。補充してから行ってください。

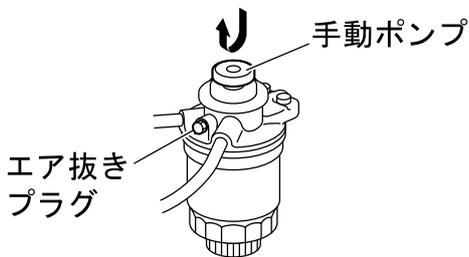
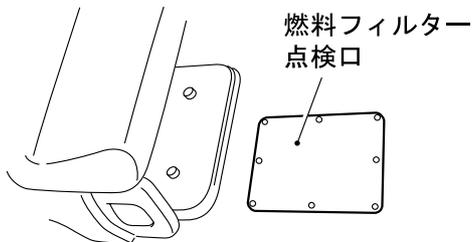
⚠注意

- ・ブースターケーブルは容量の大きいものを使用してください。
- ・救援車は故障車と同じ電圧の車を使用してください。
- ・バッテリーの充電は車から外して行ってください。

4. 燃料切れになったとき

●エア抜き方法

燃料切れでエンストしたときや燃料フィルターを交換したときは、燃料系統中に空気が入っているので燃料を補給しただけではエンジンを始動することはできません。



次の方法でエア抜きを行ってください。

- ・ 出入り口後部席下床面にある燃料フィルター点検口を開けます。
- ・ 燃料フィルターのエア抜きプラグを緩めます。
- ・ エア抜きプラグ部に布などを当て手動ポンプを押し燃料を送ります。
- ・ 気泡のない燃料がエア抜きプラグ部から出てくるまで送ります。
- ・ 完全に気泡がなくなったらエア抜きプラグを確実に締付けます。さらに手動ポンプを押す力が大きくなるまで数回押します。
- ・ エア抜き終了後こぼれた燃料をよくふき取ってエンジンを始動してください。
- ・ 燃料漏れがないか確認してください。

⚠ 注意

- ・ こぼれた軽油はきれいにふき取ってください。また、必ず燃料漏れがないか確認してください。燃料漏れは火災の原因になります。
- ・ エア抜きの際、作業スペースが狭いので周囲の部品のエッジ（バリ）等でケガをしないよう注意してください。